

新 潮 文 庫

田 園 交 響 樂

アンドレ・ジイド
神 西 清 譯



新 潮 社

樂響交園田



定價 60 圓

新潮文庫

昭和二十七年七月十五日 發行
昭和四十一年四月三十日 三十三刷

譯者 神西清

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話東京二六〇局一一一(大代)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・東洋印刷株式會社 製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

新 潮 文 庫

田 園 交 響 樂

ジ イ ド
神 西 清 譯



新 潮 社 版

368

田園交響樂

第一の手帖

一八九：年二月十日

これで三日も降りやまぬ雪が、道をふさいである。十五年この方、月に二度禮拜の式を司どる慣はしになつてゐるR：へも、私はたうとう出かけられなかつた。けさラ・ブレヴィーヌの禮拜堂に集まつた信者の數は、わづか三十人にすぎなかつた。

この餘儀もないこもり居のひまに、せめては過去をふり返り、私がジェルトリユードの面倒を見るやうになつた次第を物語りたいと思ふ。

あの敬虔な魂の形式と發展の跡を、のこらずこの手帖に書きとめて置きたいのだ。私があの魂を闇の中から救ひ出したのは、神への讚美と愛とのために、ほかならなかつたやうに思はれる。この仕事を託し給へる主は讃むべきかな。

今ではもう二年半も前のことだが、私がショー・ド・フォンから歸つて來たところへ、見知らぬ小娘が大急ぎで、私を迎へに來た。二里ちかい道のりを、息を引取りかけてゐる氣の毒な老婆のところまで、來てくれといふのである。馬はまだ外してなかつた。とても暗くなる前には歸途につけまいと思つたので、まづ角燈の用意をして、その娘を馬車に乗せた。

私は村の近傍に知らない場所はないつもりであつた。ところが、ラ・ソードレーの農場を過ぎたとき、娘は私がそれまで乗り入れたこともない道を取らせた。とはいへ、左手にあたつて半里ほど向うに見える、神秘的小さな湖には見覚えがあつた。若いころ、私が時々氷滑りに行つた湖である。けれど、牧師になつてからは、その邊へ呼ばれて行つたことがなかつたので、十五年のかた絶えて見かけなかつたわけである。人に聞かれたにしても、その在處さへ思ひ出せなかつたに違ひない。いま、夕暮どきの流す一面の舊微色と金色のなかで、ふと見覚えのあるその姿に接した時にも、何かの夢で見たのかしらと思つたくらゐ、その湖のことは私の念頭を去つてゐた。道は、湖から流れ出る小川について森のはづれを切り、やがて泥炭地のほとりに沿つて行く。この邊は確かにほじめて来る場所である。

日は沈みかけて、もうだいぶ前から道は薄暗がりになつてゐたが、やうやく案内の娘は指をあげて、丘の中腹に見える一軒の茅ぶきの家をさし示した。薄闇のなかを青みがちに立ち昇つて、やがて空の金色の中へ融け入る一すぢの細い煙がなかつたら、とても住む人のある家とは思へないだらう。馬を傍らの林檎の樹につないで、娘のあとを追つて暗い部屋へ私がいつたのは、老婆が今しがた息を引取つたところだつた。

あたりの風景の重々しさ、それに時刻の静けさと嚴そかさ、私の骨の髓まで沁みとほつた。まだ若い女が一人、寢臺のそばに膝まづいてゐる。亡くなつた老婆の孫娘かしらと思つたあの小娘は、間もなくただの召使とわかつたが、くすぶる蠟燭をともしたのち、じつと寢臺の裾の方にとたずんだ。私は長い道すがら、なんとか話をしかけようと骨を折つたけれど、二言三言しか口

を利かせることが出来なかつたのである。

膝まづいてゐた女が立ちあがつた。これも、私をはじめ想像したやうに親類の者ではなくて、ただ近所に住む知合ひの女に過ぎなかつた。主人の様子が變つたのを見て、あの小娘が呼びに行つたのを、そのまま通夜に居残つてくれることになつたのである。その女の話では、老婆はごく安らかに息を引取つたといふことだ。私たちのあひだの相談で、埋葬や葬式の手はずがととのつた。これまでもあつたことだが、何しろこんな邊鄙な土地では、やはり私が萬事をとり仕切つてやるほかはなかつた。また私にしてみれば、いくら見かけは見すばらしくとも、とにかく一構への家を、近所の女と、年端もゆかぬ女中さんの手に任せきりにして置くのは、なんとなく不安でもあつたのだ。まさかこの惨めな住居の片隅に、何かの寶がかくしてあらうなどは、もとより考へられもしなかつたけれど。……さて、どうしたものだらう。とにかく私は、老婆に相續人はないのかと尋ねてみた。

すると近所の女は蠟燭を手に取りつて、燵の方へ差しつけて見せた。火床ひどのなかにうづくまつて、どうやら眠つてゐるらしいものの姿が、おぼろに見わけられる。房々した髪のかたまりが、ほとんどその顔をおほひかくしてゐる。

「この娘は盲めくらで、女中さんの話では姪めいだとかいふことです。家の者と言つても、これつきりらしいのです。養育院へでも入れなければなりませんでせう。さもないとこの娘は、どうなることやら分りませんものね。」

本人を前に置いて、づけづけと身の上を決めてかかるのが、私には厭いとな氣持だつた。この薄情

な言葉が娘の胸に、どんなに悲しく響くことかと氣づかはれた。

「起きないやうにおし。」

せめてこの女の聲なりと低くさせようと思つて、私は穏やかにさう言つた。

「いいえ、眠つちやをりますまいよ。この娘は白痴なんでしょう。口も利けませんし、人の話も何ひとつ分りませんのです。私は今朝がたからこの部屋にをりますが、この娘は身じろぎ一つしないで、じつとかうしてゐますの。最初はつんぽ聲かと思ひましたが、女中さんの話ではさうでもないらしく、聲なのはお婆さんの方だと言ふことです。その婆さんがまた、この娘にといはず、ほかの誰彼にといはず、まるつきり口を利いたことがなかつたさうで、口をあけることと言つたら、もうよほど以前から、物を食べる時だけだつたさうです。」

「幾つになるのか知ら。」

「さあ、十五ぐらゐちやありませんかしら。なにせ私もまるつきり知りませんので……。」

身寄りもない可哀さうなこの娘の面倒を、自分で見ようなどといふ考へは、その時すぐに浮んだわけでもなかつたが、祈禱を濟ませたとき——いやもつと正確に言ふと、寢臺の枕もとに膝まづいた近所の女と召使の小娘とのなかにはさまつて、やはり膝まづいて祈禱を上げてゐるうちに、にはかに主が私の道の行手に或る義務を下し給うたやうな氣がして、それを逃がれるのはどう見ても卑劣な振舞ひとしか思へなくなつたのである。で、立ちあがつた時にはもう、その夜のうちに娘を連れて歸らうと心にきめてゐた。とはいへ、連れて歸つてどうしようと云ふのか、一たい誰の手にあづけたものか、などといふ點になると、まだ氣持ははつきり決まつてゐたわけ

もなく、そのまま暫くは老婆の寢顔に、じつと見入つてゐた。落ち窪んで、ひだの寄つた口もと
は、びた一文も出すことではないと、紐できりりとくくつた守錢奴の財布の口を思はせた。やが
て私は、盲らの娘の方をふり返つて、私の考へを近所の女に打ち明けた。

「そりや明日の出棺のときは、この子のあない方が好都合ですとも。」

女はさう言つた。それですつかり話がついた。

もし人間に、いい加減な反對を唱へて嬉しがる癖がなかつたら、世間の物事は随分すらすら運
ぶに違ひない。周圍の者の、「あいつに何ができるものか」と繰り返す聲が耳にはいるばかりに、
私たちは、したいと思ふあれやこれやのことを、子供の頃からどれだけ手を着けずに過して來
たことだらう。……

盲らの娘は、まるで意志のない何かの塊まりのやうに、連れ出されるなりに任せてゐた。目鼻
だちとはとのつて、まづ美しい方といへるが、全くの無表情だつた。部屋の間、屋根裏へ通じ
る内梯子の下のとこに、この娘がふだん寢場所にしてゐた藁ぶとんがある。私はそこから毛布
を一枚とつて來た。

近所の女はお愛想を見せて、娘を念入りにくるむ手傳ひをしてくれた。夜ぞらが冴え返つて、
冷えびえしてゐたからである。馬車の角燈に火を入れると、まんまるにちぢかまつて私にもたれ
かかる。魂の抜けた肉塊の毛布包みを乗せて、私はその家をあとにした。どんよりと體溫が傳は
つてくるので、わづかに生きてゐることが分るのである。みちみち私は考へた。——この子は眠
つてゐるのかしら。だとすれば、それはどんなにか暗い眠りなのだらう。……それにこの子にと

つて、眠りと目覺めとはどこがちがふのだらう。主よ、この不透明な肉體のうちに棲む一つの魂は、その中にとざされながら、あなたの恵みの光の來て觸れる時を、待ち望んでゐるに違ひありません。私の愛の力が、この魂から怖ろしい闇を拂ひ退けることを、主よ、あなたはお許し下さるのでせうか。……

何よりもまづ眞實を重んじる私は、歸宅してから受けなければならなかつた辛い待遇のことを、書かずに済ますわけには行かない。私の妻は徳の園にも譬へていい女だ。時をり持ちあがる二人の間の揉めごとの最中でさへ、私は妻の氣だての美しさだけは、片時も疑ふ氣はしなかつた。ただ、その生まれついた慈悲心は、妙に不意打ちを嫌ふのである。几帳面な女の常として、義務をなほざりにしない一方では、その限界を越えることも差し控へたがるのである。愛の泉も、何時かは汲み盡くされる時があると思ふのか、妻の慈悲心には、おのづからなる節度があつた。これが唯ひとつ、私たちお互ひの意見が、しつくり合はない點なのだが。……

その夜、私が小娘を連れて歸つたのを見て、まづ妻の念頭にのぼつた考へは、次のやうな叫びになつて現はれた。――

「あなたは、また何を背負^{しよ}ひ込んでいらしたの。」

家の者みんなに言つて聽かせることのある時のいつもの例にしたがつて、私は先づ子供たちに出て來させた。みんなびつくりして、不思議さうに口をあけて立つてゐる。ああこれは、私のひそかに願つてゐた扱ひとは、なんとか離れたものだらう。ただ小さなシャルロットだけは、何

かしら目新しい生き物が馬車から出ようとしてゐるのを見て、手をたたいて小踊りしはじめた。すると、母親に仕込まれきつた他の子供たちは、急いでそれを制して大人しくさせた。

それから暫くは大騒動だつた。妻も子供たちも相手が盲らの娘とはまだ知らないから、手を引いてやる私の極度の用心ぶかさが、腑に落ちないのだつた。私は私で、道々ずつと握りとほして來た手をはなすや否や、この哀れな片輪の子が異様な呻き聲を立てはじめたので、すつかりうろたへてしまつた。その泣き聲はとも人間の聲とは思へず、小犬の悲しげな啼き聲を思はせた。

これまでずつと彼女の全宇宙を形づくつて來た狭苦しい感覺圈の外へ、はじめて引っぱり出されたためか、その兩膝は自分のからだの重みにすら堪へないのである。椅子をすすめてやつても、まるで腰かけたことのない人のやうに、床のうへにくづ折れてしまつた。そこで煖爐の方へ連れ行つてやると、あの老婆の家の爐端ではじめて見かけた時の姿そのままに、煖爐の張出し枠にからだを丸めて寄りかかつて、やつとのことで幾らか落着きを取り戻したらしかつた。馬車の中でも座席からずり落ちて、私の足もとにちぢかまりどほして來たのである。妻も、とにかく手だけは貸してくれた。いつたい私の妻は、自然のままにしてゐる時が一番いいのだが、絶えまなしに理性を働かせするため、かへつて心にもない羽目に落ちいることが多かつた。

「これを、どうなさるお積りなの？」

ひとまづ娘が落着くと、妻はまたさう言ひ出した。

この中性の呼び方は、ぎくりと私の胸にこたへ、忿怒を抑へるのが容易なことではなかつた。しかし、最前からの安らかな瞑想にまだ浸りつづけてゐた私は、じつとそれをこらへて、ふたた

び輪を描いて取り巻いてゐる皆んなの方を振り返り、盲らの子の額に片手をのせたまま、

「失はれた羊を連れて歸つたのだよ」と、できるだけおどそかな口調で言つた。

けれどアメリカは、いやしくも道理を外れたり超えたりしたことは、福音書の教へにあるはずがないと思ひ込んでゐる女である。何か言ひ返さうとする素振りが見えたので、私はジャックとサラに合圖をして、下の二人を連れて部屋を出て行かせた。彼らは両親の間のいざこざには慣れつこになつてゐるうへに、生れつき餘り好奇心の強い方ではない（私の眼にはしばしば不足とさへうつつたものである——）。それでもまだ妻が小さな闖入者に氣を兼ねて、じれ氣味のやうに見受けられたので、私はかう言ひ添へた。

「この子の前なら話しても大丈夫だよ。可哀さうに、なんにも分らないのだからね。」

そこでアメリカは、どうせ私なんか、なんの言ふこともないのですけれどと、いつも長談義には附きものの前置きから始めて、それにあなたが、たとへどんなに習慣や常識に外れた非實際的なことをお思ひつきにならうと、私はやつぱりあなたの言ひなりになつてゐるほかはありせんものねなどと、不服を並べはじめた。この子の始末について、私がまだ何ひとつ方針を立ててなかつたことは、前にも書いて置いた。手もとに置いて世話が出来ようなどとは夢想だもしてをらず、よし考へてゐたにしても、ほんの漠然としたものだつた。一體この考へは、「これだけあれば、うちはもう澤山」とお思ひではないかと、たたみかけて尋ねたアメリカの言葉のおかげで、はじめて私の頭の中に、はつきりした形を取つたと言へるのである。妻はなほ、私が家族のことなど一向お構ひなしに、自分勝手な眞似ばかりするとか、彼女としては五人の子供だけで十分だ

と思ふし、それにクロードが生まれてからといふもの（丁度このとき、まるで自分の名を呼ぶ聲が耳にはいりでもしたやうに、赤んぼは揺籃ゆりかごの中で泣きだした——）、もう「ぎりぎり一杯」で、これ以上はとも手が廻らないなどと言ひ立てた。

妻の詰問の初めの文句を聞きながら、キリストの言葉が胸から口もとまで上つて來た。しかし、聖書の權威のかけに自分の行爲をかくまふのは、いかにもにがにがしいことに思はれたので、私はそれをじつと噛み殺してしまつた。だがやがて妻が、世帶の苦勞のことを言ひ出す段になると、私はろくろく顔を上げてゐられなかつた。輕はずみな熱情のほとばしるに任せた學句、とどのつまりは重荷を妻に負はせて顧みなかつた身の覺えが、一再ならず私にはあつたからである。それにしても妻の咎めだては、かへつて私の義務の念を呼び覺ますことになつた。で私はアメリカに向つて、もしお前が假りに私の立場に立つたとしたら、やはりこのやうに振舞ふのではなからうか、それとも、みすみすなんの寄邊もないと分つてゐる子を、窮地に見すて置くことが出來るとお思ひか、よくよく考へてごらんと、おだやかな言葉で頼んでみた。それからなほ、これまでの世帶やつれのうへに、またこの片輪の厄介者まで背負ふのでは、さぞ苦勞も重なることと察しないではないが、心に思ふばかりでこれまで以上には手助けもできない自分が、われながら齒がゆくてならないとも附け加へた。かうして私は、言葉を盡して彼女の心を宥め、そのひまには、なんの罪咎もない無心の娘にくれぐれも惡意を抱いてはくれないと頼み込んだ。そのうへ、サラもこれからは少しは増しな手助けもできる年頃だし、ジャックの方もそろそろ手が抜ける頃であることも、彼女に氣づかせるやうに仕向けた。つまりは、もしも私がこんな風に出し抜けに

その意志に働きかけないで熟考の時をさへ與へてやつたら、むしろ自分の方から進んで世話役を買つて出てくれたに相違ない妻なのだが、その妻を勵まし承知させるやうな言葉を、主は私の口に置き給うたのである。

勝負はまづこつちの物と私は見た。アメリカは早くも情のこもつた面もちで、ジェルトリュードの身ぢかへ寄つて行く。ところが、とにかくどんな子なのかしらとランプを差しつけて見て、その子のなんともいへぬ穢ならしい有様を認めたとき、抑へに抑へてゐた彼女の怒りは一どきにはじけ返つた。

「まあ、なんて臭い！」と、彼女は叫んだ、「着物を拂つていらつしやい、さ、早くさ。いいえ、ここぢやいけません。外へ出て振つていらつしやい。まあ、どうしよう。子供にみんなたかつてしまふぢやありませんか。およそ何が厭だつて、虱ほど厭なものはありませんわ。」

なるほどさう言はれて見ると、可哀さうに娘は虱だらけだつた。それを馬車の中で長いこと、びつたり寄り添はせてゐたのかと思ふと、私はこみ上げて来る嫌惡の念を如何ともなしえなかつた。

できるだけ念入りに服を拂つて、數分ののち部屋に戻つた私は、妻が脇掛椅子にくづ折れて、頭を抱へて咽び泣いてゐるのを見た。

「お前の實意を、こんな試煉にあはせるつもりはなかつたのだよ」と、私は慢しく聲をかけた、「なんにしても、今夜はもうおそいし、それによく見えもしまい。私はこの子の寢てゐるそばで、火の番をして夜を明かすことにしよう。明日になったら髪を刈つて、よく洗つてやらうぢやない